第３回ささやま医療センターの産科充実に向けての検討会会議録

日　　時　令和元年８月３１日（土）１９：００～２１：００
場　　所　丹南健康福祉センター２階第一会議室
出席委員　酒井隆明、平野斉、小嶋敏誠、西潟弘、西田直美、太田鈴子、
　　土性里花、畑弘恵、松本正義、深田和泉、高瀬晶子、成瀬郁、稲川なをみ、
　　加古佳与子、稲川沙弥佳、田村博子、岩田瑞希、谷岡春南、中嶋唯、
顧　　問　小西隆紀
兵 庫 県　新林正哉
欠席委員　芦田定、
事 務 局　横山実、山下好子、吉田久仁子、堂東美穂、小西雅美、仁木秀樹

会議資料・資料１　レジメ
　　・資料２　第２回兵庫医科大学との協議の結果まとめ
　　・資料３　専門家の見解
　　・資料４　「産む」を語ろう！　案内チラシ

１．開会
２．市長あいさつ
３．検討事項
（１）兵庫医大と市との協議報告について
　　山下次長　第２回兵庫医科大学との協議の結果まとめ　説明　参照・・・資料２

（事務局）
分娩休止以外について、婦人科疾患や不妊、月経異常、ピルの処方などの対応についてお聞きしたところ、産婦人科の診察については継続するという回答を得ている。
小児科についても、分娩休止に伴い縮小されるのではないかということをお聞きしたところ、赤字部門ではあるが、継続するということであった。

（委員長）
以上が、８月２０日の兵庫医科大学との協議結果である。分娩を続けてほしいという市の申し出と安心安全なお産はできないという病院側の意見は平行線のままだった。結論として、他に方法があるのかないのか、あればどのような方法があるのかを併せて検討していくと伝えている。

（委員）
前回の協議の時に兵庫医科大学側に、自治会長会からの署名を渡されたと聞くが、どのような感じだったのか。

（委員長）
２６０集落のうち２５４集落からの自治会長の署名を西潟会長から提出を受けて、兵庫医科大学側に提出した。市民の気持ちはいくらかわかっていただいたかもしれないが、方向性はすでに理事会で決定していると言われた。市としてもこちらの気持ちも伝え続けていかなければいけないと考えている。
次に、参考として専門家の意見もお聞きしているので、紹介させていただきたい。

（事務局）
専門家の見解　　説明　参照・・・資料３

（委員）
兵庫医科大学ささやま医療センターは、研修医のための研修病院でもあるが、産婦人科でお産を取り扱わなくても研修病院として問題はないのか。

（委員）
研修医は、２年間研修する期間があり、ささやま医療センターと本院で研修できるため、本院で産婦人科を選べば分娩についても研修することができる。

（委員）
本院は、産科医が４人以上いるから分娩を継続できるのか。
助産師人数を取り揃えているはずである。

（県職員）
人数は、わからないが分娩ができる体制は整っている。

（委員）
これまで、２名で分娩を続けていただいて、前任医師の犠牲的社会貢献だと思う。しかし、他の医師に同じことを強いるのは過酷だと考える。母子の安全につながるかを考えるべきである。医師の過労死等、過酷な職場環境を再現するべきではない。精神論ではどうにもならない。戦争時の特攻隊が脳裏に浮かんだ。そのためにも議論を重ねていただきたい。

（委員長）

精神論は述べていない。医師２人で不安なら、兵庫医科大学として医師を増やす努力や安全な分娩ができる体制がとれないか、たとえば、兵庫医科大学から他の病院へ派遣している医師をこちらに回して頂けないかということをお願いしている。
それが協定であると思うが、兵庫医科大学にその気持ちがない。県からも話して頂いたが協議は平行線である。以前のように、地域医療を大切にして、丹波篠山市の医療も大切にするという考えが薄らいでいるように感じる。少なくとも今の体制を維持したうえで何らかの方法を考えて、市民の気持ちを一つにして意思決定を兵庫医科大学に伝えていくしかない。

（委員長）
次に、自治会長会の取り組みをお聞かせください。

（委員）
９月の広報で全世帯に署名用紙を配布し、各自治会で集約して市へ提出する計画をしている。９月３０日にはおおかたの枚数が上がってくると思うが、また皆さんを含めて協力をお願いしたい。

（副委員長）
協議の報告を踏まえて、私たちの明るい未来のために、安心して子どもを私たちのまちで産める方法をこれから皆さんにご意見をお願いしたい。
その前に、早速市民団体が前向きな活動を動き始めておられるので、まず「丹波篠山市のお産を考えてみよう」という活動をご説明下さい。

（委員）
５月の検討会準備会に参加した市民からバースセンターに感銘を受け、妊婦さんや子育てママに集まってもらって、お産のことをざっくばらんに話する茶話会をしたいと相談があった。実際、兵庫医科大学との協議の中では病院側の「できる、できない」で話が進んでおり、出産をする女性の声が十分拾い上げられているのか疑問を持ったので、提案に賛同して会を立ち上げた。会の目的は三つある。
・女性が「産むこと」にじっくり向き合い、思っていることを表現する機会をつくる。
・丹波篠山市が安心して生み、子育てをできる市であるため、女性の生の声を拾う。
・Ｍｙ助産師制度など新しい女性中心のケアの取り組みを紹介する。
２０１８年２月のＷＨＯの「分娩期ケアに関する新ガイドライン」では、先進国では不必要な医療介入が増え健康な女性が健康なお産をすることが阻害されてきているため、女性中心の視点が盛り込まれている。女性を中心に「産む」ことを考えることは世界的な流れになってきている。また今の悶々とした市の状況はその流れになく、女性中心でなく、ど

ちらかと言えば病院中心の考えで進んでいることに危機感も感じている。
とにかく、参加するお母さんが声に出してお産を語り、意見を聞ければ何か今の状況を突破する糸口が見つかるかも知れないので、どなたでも興味ある方は参加して下さい。

（副委員長）
検討会だけでなく市民の声が集まる機会である、是非とも「産む」を語ろう会を広報して頂きたい。

（委員長）
検討会では、どうしてもお母さんの立場での安全、安心ではなく、兵庫医科大学の体制の中での安心、安全という話なので、市民の中からこのような動きを始めて頂くのは、大変有り難いことである。

（委員）
先ずは始めてみて、今後につなげていけたらと考えている。
関西テレビ報道ランナーで放送されたが、産科の充実、安心、安全を言われていたが、内容が病院よりで、集約されて遠くの病院に行くことになると、車中分娩や分娩時間、天候等でお産のリスクが高くなるということを踏まえた病院の発言ではなかった。女性の思いや考えを少しでも引き出したい。

（副委員長）
会で出た意見をまとめて、検討会で報告願いたい。

（委員長）
兵庫医科大学は来年の３月までしか分娩を扱わないと言われている。４月以降は里帰り出産もできなくなるし、今妊娠して４月以降が出産予定となる方は、たちまち困られてしまう状況が出てきている。本来はきちんと協議をした後でなることが、もう進んでしまっているので、いつまでも方策を検討して結論が出ないのではなく、できるだけ早いうちに次のことを考えていかなければならない。
今ある資源としては、ささやま医療センターの産婦人科医が２名、助産師が常勤で２名、非常勤が１名の今の体制は維持して頂ける、場所もある、そしてタマル産婦人科もある。こうした状況を生かして、どういう方法があるのか意見をお願いしたい。

（副委員長）
次の検討会までに、それぞれどういった方法があるのか考えて頂き、進むべき方向性を協議していきたい。

（委員）
兵庫医科大学の存続にむけた協議をお願いしているが、もう少し長期的な検討が必要ではないか。まずは医学生の教育をし、何年後には分娩を再開できるように長期的な期間を設けてはどうか。

（副委員長）
兵庫医科大学は来年の３月で分娩をやめるという方向だが、長期的な目を見るとして、その間は分娩をやめるということか。

（委員）
分娩をやめても、まず医学生を育てて、またここに帰ってきて欲しいとお願いしてはどうか。

（委員長）
また長期的に分娩が再開し、日本社会の中で産科医が増え、意欲的に働きやすい環境にするということは必要であるが、当面市において分娩をどうするか、それも合わせて検討しなければいけない。

（委員）
ささやま医療センターとタマル産婦人科との連携は難しいのか。
選択肢の一つとして、分娩はタマル産婦人科や丹波医療センターと連携するとか。
産むまでにお母さんも勉強するし、緊急な場合は済生会へ行くシステムもあるので、健康なお産はもっとタマル産婦人科などでできるという方向で検討できないか。

（委員）
現在は、タマル産婦人科では不安、生みたくないという方が医療センターを受診している現実があると思うので、タマルへ行くことを納得できるかどうか。
また、タマル産婦人科も受け入れをお願いしたら嫌とは言われないと思うが、夜勤も一人体制などギリギリの状況でやっている。助産師も３人であり、長い目で考えた時にそれがいつまで継続できるかという問題と、受診にくる女性の選択権を考えたときに、兵庫医科大学で産めないからタマルでいいという人がいるのかどうか。長期的にみるとしたら、１０年度にタマルが継続しているか分からない。市が主導した出産支援施設、小規模で年間分娩数が１５０前後、月１２件ほどで、市内在住と市内に実家がある方や里帰りに限定したものができると、長い目でみたら市民も安心できるのではないか。

産科医が１名でも来てくれるなら産科単独の診療所があれば、集中したケアが提供できてお母さんにもメリットがある、また、安全面からも産科医が１名でもいると助産師も安心で一番よい形だと思う。しかし、産科医の確保が難しいなら、助産師主導のバースセンターはどうか。
昭和３３年に国の主導で全国に母子健康センターの設置が行われた。これは、助産設備を併設した助産部門と保健指導部門を一体化した地域における保健施設のことで、健康課に設置した子育て世代包括支援センター「ふたば」とお産をする施設が合体したイメージである。昭和４０～５０年代になると病院でお産をする施設が増え、母子健康センターが廃止された経緯がある。母子健康センターで産科医はいないが助産師がお産をしており、今も大阪の高石市に高石市立母子健康センターが残っている。助産師が複数いて、助産師主導で分娩、保健指導、産後ケアを行い隣接する堺市民病院等と連携がある。こういう形をとる場合、国や県の補助がとれるのではないか。視察の受け入れもあるようだ。

（委員長）
産科単独の診療所、または助産師主導の母子健康センターはどうかという提案になるか

（委員）
医師が一人でも常駐できるなら診療所、医師確保が難しいなら母子健康センターという形が可能ではないか。診療所では何か異常があった時に対応できるよう必ず１名の医師が必要、助産師は５名、その他看護師等のスタッフになる。医療センターの若い助産師たちも来てもらえたら嬉しい。

（副委員長）
2017 年の緊急声明によると、出産の 47%が診療所でうち 7 割が常勤医 1 名の出産である。沢山こういう形で生まれている現状がある。

（委員）
丹波篠山市のお産はけっして多いわけではない。使命感のある医師１名とベテランの助産師がいれば、ある程度正常なお産なら医師がいなくても可能である。そして、ある程度の助産師が確保できれば、医師に過度の負担がかからないように、正常なお産は助産師で行うことができれば、市で分娩施設をもつことも可能になってくるのではないか。

（委員長）
ささやま医療センターの二人の医師は残るとした場合、その診療所や助産施設との関係はどうなるのか

（委員）
もし、市が医師の確保ができない場合は助産院のような形になるので、週１回の健診や帝王切開が必要な場合はお世話になるなど協力体制がとれるのではないか。
また、分娩を休止しても、帝王切開等はして頂けないか。医大に歩みよりはできるのか。

（委員長）
市民の気持ちとしても、最低限医大には今の体制を残してやって欲しいと考えている。

（委員）
前回、田中先生が副院長だったということを知り、本来なら産科充実の立場で来られていると思っていたら、反対の止める方向でおられたのに意外であった。
医師２人で大変だと言っているなら、医師を市も一緒になって、退職された医師でまだ働ける医師などを募集するなど、助産師さんも本当にいないのかと思う。大学だけでなく一緒になって募集すれば手を挙げてくれる人がいるかもしれない。
兵庫医科大学との協議の内容を聞かせてもらってもかなり厳しい状況で、兵庫医科大学側に 1%でも 2%でもできるとしたらを考えるというのがない中で、市に何を求めているのかが見えない。
自治会長会からの署名については、ある自治会では返信用切手をつけて集めているところもあると聞いた。市民の声を真摯に受け止めていただきたい。２人目３人目となると、近いところで産みたいという希望もある。
金額的なこともあり、診療所もできるかどうかもわかりませんが、タマル産婦人科に全部引き受けていただくこともできないだろうし。

（委員長）
１０年前の存続の時も厳しいこともあったが、当時の理事長が地域医療を大切にされていたことに救われた。本来なら、赤字の病院は切り捨てたいと思うが、兵庫医科大学の設立当初の基本理念に地域医療の充実があり、昨年協定も結び安心していた。理事長が交代になり、考え方が一遍した。産科を続けるなら、池田医師も退職されても雇用するはずだった。今思えば、産科の継続は考えていなかったということだと思う。今さら協定違反だとか兵庫医科大学の使命はどうなっているかといっても仕方がない。
兵庫医科大学に頼んだのは、私立の病院ではなしに、教育機関でもあり、信頼が高いと思ったからである。そのような機関が、地域医療を捨ててよいのか。今の理事長は、凶暴に方針を決めておられる。そのため、次の方針を考えざるをえない。その中でできるだけの兵庫医科大学としての協力、支援、連携はとっていたくようにお願いしていく。市民の皆さまの声を届けていくことは大変意義あることだと思う。
経営ということを考えると、市からの支援はしているが、兵庫医科大学にしてみればしれ

たものであると思っている。

（委員）
もし分娩ができなくなるとなったら、今兵庫医科大学への運営費年額１億２６００万円の支援は、今後減額できるのか？それならば、そのお金を今後考える新たなことへ使用できればと思う。

（委員長）
そのことについては、今後の協議になる。
救急の９０００万円は、他の岡本病院、西紀記念病院にも払っている。残りの１億２６００万円は地域の中核病院であるから払っている。これからの協議だが、下げようとは思っていないのではと思う。

（委員）
協定の時に、もともと黒字になったらどうなるのか確認した時、累積赤字があることを言われた経緯がある。累積赤字が埋まるまでは、補助をするとなっている。
今後検討していくことについては、別会計で考えていくのが現実的と思われる。

（委員）
協定を昨年結べたのは、今の理事長が２年半篠山市に来られ、病院の立て直しをされたためであると思っている。平成３０年度も２億２７００万円の赤字になっているが、頑張っていただいている。市民がいかに支えるかである。この検討会は、公になっておりヤフーニュースにも出て、かなりの反響がある。産科の先生だけでなしに、他の先生方のモチベーションが下がらないか気になっている。赤字を抱えてここまで貢献してきてくれたことを出していかないといけないと思う。

（委員）
初めて分娩休止と聞いたときは、もちろん継続してほしいし、丹波篠山市で分娩できるところが１か所しかないというのは不安だし嫌だと思った。病院側として大きなリスクを抱えたくないということもあるのかなと思った。
２回目の会議録を読み、全国的に産科医師が少ない、安心安全な分娩のためには分娩休止は仕方がないということも理解できた。
自分は、２５歳で未婚、出産経験はないが、姉が３人いて６人の伯母である。安産の子もあれば、逆子で帝王切開の子もある。現在２歳の子は、妊娠９ヵ月で異常が見つかり、姉の入院先が転々とし、産まれてからも ICU に入院になり大変であった。しかし、どこからが安産で、どこからが安産でないかの判断がわからない。不安の大きさも人それぞれ違う。

現場をよく知っている医師の判断から分娩を休止せざるをえないのかなとも感じた。
協議が平行線と報告があったが、このまま時間が過ぎると今妊娠された方は不安であると思うので、兵庫医科大学も市もどこか折れて話し合いが進むことを希望する。

（委員）
協議の結果は平行線と聞いたが、市は少しでも兵庫医科大学に歩みよっていこうとしているように感じるが、兵庫医科大学は、離れているように感じる。
今、委員からの提案もあり、妊娠がわかりある程度のところまで診て頂き、出産はあちらへは、人間関係、信頼関係が築けない。最初から任せるところがあるべきだと思う。
産む立場の方は、何なんだろうと思う。
ここまできたら、兵庫医科大学に何がなんでもしがみつくのではなく、１日でも早く目線を変えて進んでいくのがよいと思う。
自治会長会からの署名が自分の家にも届いたが、出したところで兵庫医科大学がどのように受け止めてくれるのかは疑問である。

（委員長）
協議は平行線だが、前回の協議の最後に、このままでは解決できないので他に方法がないのかについて検討すると市が歩み寄っている。理事長はとても喜ばれた。
兵庫医科大学には感謝もしているし、これからもがんばってもらわないといけない。兵庫医科大学の方針が変わり、「はいそうですか。」と言える立場ではない。産科は、市民の希望である。
市長日記には、産科医が命を削って頑張ってほしいとは書いていない。そういう体制を作ってほしいと書いている。

（委員）
関西テレビの報道ランナーを観たが、病院側の報道だったなと感じた。この会の音声は流れていなかった。

（委員長）
いろんな方法をこちらで考えて、その上で兵庫医科大学の協力を求めていきたい。市民の署名は無駄なことではない。

（委員）
報道ランナーは、自分も観たが病院側の報道であったと思った。
兵庫医科大学が医師不足と言っているのは、あくまで建前で地域医療にあまり目を向けてないから言われているかなと思う。

子どもの数が少ないのが問題ではないか。人口を増やすまではいかなくても、子どもの数を増やす取組として、子育て支援を充実させて、今の子育て支援もうまくアピールできていないように思う。
丹波篠山市に住んで、大阪まで通勤できる家庭が増えたら、子どもがもっと増えるのでは。未来の未来まで目を向けられるならいいと思う。今後の子育て支援の充実の予定はあるのか。

（委員長）
具体的な提案をしていただいたらよい。

（事務局）
庁内プロジェクトで子育て支援について検討が始まった。７名の委員で取り組んでいる。その中で、７割の女性は、都会で生活したいと思っているが、３割の女性は田舎、農とか自然の中での生活を望んでいる。その３割をいかに丹波篠山市に住んでもらえないかということについて話し合いを始めている。

（委員）
今言われた産科単独の診療所とか母子保健センターの案が出て、兵庫医科大学との連携を言われたが、連携について、こちらが決めるのではなく産む女性が決めるのが良いと思う。例えば始めは協力隊として産婦人科医師等を誘致し、２年居てもらってそのころには母子保健センターなどができていて、そのまま丹波篠山市に永住してもらうとか、兵庫医科大学と何かの連携を考えないといけないということを無理に考える必要はないと思う。婦人科は、継続されて今後も病気等を診てもらえるということで、産科については分離して考える方がよいと思う。産む女性に対して病院の立場からでなく、産む人が選べる権利を行使できるのがよいのかなと思う。

（委員）
平行線のままというお話があったが、医療センターで勤務していたため、病院側の考え方もわかる。市は医療センターに協力している。医療センターは、篠山に来て赤字になったが、黒字になる企業努力もすべきだと考える。篠山のオリジナルを考えるということもよいが、兵庫医科大学も一度引き受けた以上、協力すべきだと考えるので、お願いすべきことは要求してもよいと思う。バースセンターにしても、何か起こった時にサポートしてもらう病院が必要になる。市独自で考えるのではなく、協力してもらうことも考えるべきだと思う。
交通の便についても、雪が降った場合や交通渋滞があった場合、妊婦は家事を済ませてから、お産のため病院に向かうので、出発から１時間ほどで出産することが多く、病院まで

間に合わないのではないかと考える。

（委員）
丹波市からお産に来られた方は篠山まで１時間程度かかるが、年に１~２件、病院に間に合わず、病院の玄関で出産した事例がある。
そのようなことがないように、兵庫医科大学にお願いできることがあれば依頼すべきだと考える。

（委員長）
兵庫医科大学との協議は引き続き行うことになっている。しかし、次回の開催日は決めていない。なぜなら、今のままでは平行線なので、検討会で検討・協議し、兵庫医科大学と連携・協力すべきことがあればそれも含めて協議することができる。

（委員）
たとえば市が診療所やバースセンターを運営し、そこで妊婦が急変して転院する必要がある場合、地域周産期母子医療センターに直接、搬送することは可能なのか。

（事務局）
搬送することは可能である。

（委員）
雪の件について、雪が降った時に雪かきに病院に行き職員用駐車場の雪をどけた。病院の職員は一人で患者用の駐車場の雪かきをしていたが、人が足りないので市内の業者にも来てもらった。地域の病院なので、そのような時に地域の方の協力をお願いしたい。

（委員）
病院側もそのように市民が協力しているといことを理解していただく必要がある。

（委員）
病院の経営については、わからないが、安全安心な分娩は２人ではできないということではあるが、実際に今の産科が赤字になり、そのために分娩を休止せざる得ないのかという疑問がある。どのような経営をすれば医師が集まって、健全な運営ができるのかを成功している病院から学ぶべきだと考える。
ラジオで聞いたのだが、明石市は、子育てにやさしい市で箕面市は助産師カフェがある。
妊婦さんが困ったことがあればカフェに行きいつでも相談できる体制が整っている。
また、他市ではこども食堂を営業しているところもある。篠山でも、助産師カフェのよう

なことを実施すれば人が集まるのではないか。

（委員長）
丹波篠山市でも子育て支援策をやっている。医療費の無料化、予防接種助成、特定不妊治療、不育症、子ども園、子育てふれあいセンター等、他にないことも施策として実施している。
兵庫医科大学とは協定を基本にやっているものの、頼っているところがあり、対等であるとは言えない。医療センターは、出産ができなくても、これからも地域の中でがんばっていただく必要がある。

（委員）
近くで分娩が、できるということがよいと考えるのでそのようになればと考える。
よりよい方法が考えられればと思う。

（委員）
兵庫医科大学は、地域医療連携も行っており、開業医が対応できないところも対応していただいており、地域医療についても協力いただいている。
医師一人につき、１００件の分娩が必要と言われており、安全な分娩を実施するには医師を４人確保する必要がある。医療センターで年間１８０件の分娩を行っている現状を考えると、４００件の分娩数を確保することはできない。このような状況を考えると厳しい状況で篠山だけがいい思いができるとは考えられないし、兵庫医科大学に、無理を言うこともできないと考える。

（委員）
市民上げて取り組んでいきたい。

（事務局）
次回は、９月２８日（土）午後７時から丹南健康福祉センターで開催する。

（委員長）
事前に様式を郵送するので、みなさんの提案を記入して返信をお願いした。

（顧問）
本日は有意義な話ができたと感じている。トップか代わると国であれ、組織であれこれだけ大きく変わるということがわかった。また、一度出たサービスは、スタンダードになり

更に更によいものをということになる。市内で分娩がどのようにできるかということで話合いをしていただくことになったが、意見を早いテンポで出していく必要がある。
今後、丹波地域でも周産期母子保健センターも考えていかなければと考える。一次医療だけではなく、二次医療も考えていく必要がある。市、国、市民、それぞれの立場で考えていく必要がある。